

年間第三十二主日

2018.11.11

マルコ 12・38-44

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音は、マルコ福音書においては、エルサレムの神殿におけるイエスの最後のおことばを伝えています。神殿の境内の賽銭箱に大勢の参詣者たちが賽銭を上げているのをご覧になっておられたイエスは、貧しい一人のやもめに目を留めてくださいます。そして、弟子たちを呼び寄せて、「この貧しいやもめは他の誰よりもたくさん入れた。皆は有り余るものの中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っているものの全てを、生活費を全部入れたからである」と言われたのです。これが、マルコ福音書では、神殿におけるイエスの最後のおことばになっています。この後、イエスは神殿の境内を去って行かれます。神殿を振り返った弟子の一人が、「先生、ご覧ください。何とすばらしい石、何とすばらしい建物でしょう」と言った時、それに対してイエスは、「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」と言われたのです。イエスの目には、それから四十年も経たないうちにローマ軍の圧倒的な攻撃によって、エルサレムの神殿が徹底的に破壊される日のことが見えていたのです。イエスは二度と神殿の境内に立たれることはなく、神殿の外の大祭司の館で尋問を受け、ピラトの法廷で裁判にかけられ、エルサレムの町の外のゴルゴタの丘で十字架に架けられてこの世の生を終えられたのです。そのようなイエスにとって、今日の福音に語られているあの貧しいやもめの姿は、イエスの目と心に焼きついた貴重な、エルサレムの神殿の最後の光景であったにちがいありません。だからイエスは、誰も目に留めようとしなかった、イエスだけに見えていた、あの貧しいやもめの心のうちまでも弟子たちに語り聴かせたにちがいありません。エルサレムの神殿の崩壊を見通しておられたイエスにとって、あの貧しいやもめの姿だけが、神の心そのままにエルサレムの神殿の崩壊を深く悲しまれるイエスに慰めを与えるものだったにちがいないのです。エルサレムの神殿に来られたイエスを取り囲んで議論を吹きかけた、神殿の境内を我が物顔に行き来していた人々の中で、今日の福音のあの貧しいやもめだけは、本当に、そこがどのような場所であるかを知っていたのです。

神殿は、そこで神と人々が結ばれる場であるはずでした。そのために神へのいのりといけにえがささげられるべき場所であるはずでした。イエスがその生涯の最後に神殿の境内に立たれたとき、過ぎ越しの祭りのために神殿に参詣に

来ていた人々も、そのことを少しも疑ってはいなかったことでしょう。神殿に詣でるこの祭りの日々のために、つましい生活の中で、それを楽しみにせつせと働いてお金を貯めて巡礼の旅に出て来た人々は皆、そのことをよく知っていたはずです。けれども、「先生、ご覧ください。何とすばらしい石、何とすばらしい建物でしょう」とイエスに言った弟子のように、人々は自分たちが目にすることが出来た神殿の圧倒的な偉容と祭りの賑わいの中で、神にその全てをささげるべき自分を見失ってしまっていたのです。人々は、いけにえにささげる動物の代金を納めるために両替をしてもらい、賽銭箱に賽銭を上げ、神殿の至聖所に向って敬虔に礼拝をささげていたにちがいません。けれども、その場におられるイエスの目には、あの貧しいやもめの姿だけが大きくクローズアップされて見えていたのです。あの神殿の祭りの賑わいの中で、イエスの目に留まったあの貧しいやもめだけが、真実、そこにおられる神と出会ったのです。「この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、誰よりもたくさん入れた。皆は有り余るものの中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っているものの全て、生活費の全部をいれたからである」とイエスに言っていたとき、彼女は自分がそこで真実神と結ばれていることを知ったのです。彼女のしたことの全てをその場で弟子たちに語り聴かせたイエスは、神のもとから来られた人の子、すなわち、神からその全権を委ねられたこの世の最終的な裁き主として、あの神殿に立っておられるかのようなのです。

マルコ福音書が、エルサレムの神殿に立たれたイエスのお姿を今日の福音のエピソードによって締めくくっているのは、単に時間の経過を追って事実を書き記そうとしてのことではありません。今日の福音のあの貧しいやもめのエピソードを最後に、イエスは神殿から立去られたのです。ユダヤの律法に従って毎年繰り替えされて来た祭りの賑わいと喧騒を後にして、弟子たちを連れて神殿の境内を立去られたとき、イエスは神殿の崩壊を預言されたのです。こうして、神がそこにおられ、人々がそこにおられる神を礼拝する、神と人々を結ぶ、神と人々との出会いの場としての旧約以来の神殿の役割りは終わるのです。

エルサレムの神殿は、神が定められた終わりの時に、そこに神が遣わされるメシアが来られる場所でした。メシアの到来によってこの世界の四方から地上の全ての人々が、そこに神を礼拝するために集うはず場所でした。これが、旧約の預言者たちが告げていた、終わりの時の神殿の姿です。けれども、イエスがその神殿の境内に立たれたとき、イエスの目には、それが強盗の巣のようにしか映らなかったのです。イエスはいけにえの動物を商っていた人々や両替人たちを力づくでそこから追い出し、旧約聖書の神のみことばを人々に思い出させて言われたのです。「わたしの家は、全ての国の人の祈りの家と呼ばれるべき

である。ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった。」あの貧しいやもめのように、そこで真実神と結ばれることがなければ、神殿がいかにか人々の賑わいに満ちていようとも、そこは真実神の家、祈りの家とはならず、神を前にして人間の欲望だけ渦巻く強盗の巣になってしまっているとイエスは言われたのです。

ヨハネ福音書には、このときイエスが言われたもう一つの重要なみことばが記されています。神殿の境内でイエスが行われたあのような仕事を目の当りにした人々は、「こんなことをするからには、あなたはどんなしるしをわたしたちに見せるつもりか」とイエスに問いただします。それに対してイエスは、「この神殿を壊してみよ。三日で立て直してみせる」とお答えになったのです。イエスのこのみことばを解説してヨハネ福音書は次のようにこの場面を締めくくっています。「イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこういわれたのを思い出し、聖書とイエスが語られたことばを信じた」。これがヨハネ福音書が書かれた最初の教会の、エルサレムの神殿の崩壊の預言と、イエスの十字架の死と復活を結びつける信仰の理解です。ヨハネ福音書が書かれた時代には、すでにエルサレムの神殿はイエスの預言どおり、ローマの攻撃によって破壊されつくしてしまっていたと言われていています。福音書が書かれた最初の教会は、ユダヤの人々の信仰の拠りどころであった神殿は滅びてしまっただが、十字架に付けられて死に、復活されたイエスこそが神と人々を結びつける真の神殿であるとの信仰のうちに生きていたのです。

今日の福音のあの貧しいやもめは、神がどのようなお方であるかを真に悟っていたのです。自分たちのために神はどのようなことをしてくださったかということを実に信じていたのです。旧約の信仰を生きていたこの貧しいやもめは、旧約聖書に語られている、全てのものの創造主である神、摂理をもって、イスラエルの民をエジプトから導き出し、荒れ野でマンナをもって彼らを養い続けてくださった神を信じていたのです。そのよう神への信仰を支えに、寄る辺ないその日々を生きていたのです。彼女にとっては神がすべてだったのです。その自分にとっての全てである神に、彼女は自分の全てを自分に残ったたった二枚の銅貨に託してささげつくしたのです。

今の時代、日々押し迫る生活の不安の中で、せめてこのミサのとき、わたしたちが信じているはずの神が、わたしたちにどのようなことをしてくださったか心を込めて思い起こす恵みを願いたいと思います。十字架のイエスを見上げ、そのイエスのいのちそのものである聖体を受けて、その神の愛に応える自分になれることを願いあいたいと思います。